

氏名	山下圭介	
学位の種類	博士（美術）	
学位記番号	博美第13号	
学位授与年月日	平成28年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者	
題目	学位論文題目	彫刻における空間表現「空間を彫刻する」—実験と実践
	研究作品題目	《彫刻された日常》 2015年制作、H6100×W22500×D18000mm 木、豊田市藤沢アートハウスにてインスタレーション
論文審査委員	主査教授 土屋公雄 副査教授 大塚道男 副査准教授 高梨光正 外部 金沢美術工芸大学 審査委員 准教授 金井直	

1 学位論文の要旨

本研究は、彫刻が環境に及ぼすことにより生じる、人間の空間認識の変化に着目することで、その変化を効果的に生み出すことのできる空間表現を導きだし、新たな展開を見出すことを目的としている。

研究者はこれまで、彫刻作品を発表することで、自身の空間との関わり方、彫刻作品がもたらす空間への影響について研究を行ってきた。しかしながら、それは空間という掴みどころのないものに対し、その場で起こっている現象を、ただ漠然としたイメージとして認識したものであった。そこで、本研究では、空間に対してどのような変化が、どのような要因によって発生するかを明確にする必要があるという立場から、彫刻作品が引き起こす空間への影響と建築がもたらす空間への影響を比較検討するとともに、人間と空間の関係性について検証している。

また、本研究において、空間という言葉を用いるにあたり、人の空間認識の在り方を、「量（mass）」、「空虚（void）」の二つの要素に分けて、彫刻がもたらす空間の変化について考察している。

以上の点をふまえて、本論文は以下のような構成となっている。第I章では既存の空間表現の形式を分類するために、彫刻が空間とどのような関係を保ちながら今日に至ったのかという視点から彫刻史を概観し、彫刻によってもたらされる空間への影響について考察した。彫刻は本来、建築の一部であり、彫刻には用途が必要であったこと、やがて建築と彫刻がそれぞれ独立したものとして扱われるが、20世紀になると、再び二つの領域が曖昧になってきた点を検証した。それにより、彫刻作品にとって、建築の要素を含む作品がより効果的に空間に変化をもたらしていることを導き出すことができている。さらに、彫刻と建築という二つの領域は、それぞれ異なった影響を空間に及ぼしていることから、建築における空間への作用について考察している。その結果、彫刻は空間を別の空間へと変容さ

せ、建築は空間の中に新たな別の空間をつくり出すという空間作用を確認できた。そしてさらに、この二つの異なる空間作用が同時に存在するとき、より効果的に空間を変化させることができるという仮説を導くことができた。

第Ⅱ章では、Ⅰ章における考察をふまえて、彫刻と建築の要素が融合すると、空間そのものに我々が認知しやすい変化が生じる点を、それぞれの要素を合わせもつ作家として、ウラジミール・タトリン、アンソニー・カロ、レイチェル・ホワイトリードを例として取り上げ、それぞれの作品に認められる空間への作用について考察した。その結果、それぞれ三者三様の方法をもちいて、量(mass)としての空間を測るために物理的距離を、空虚(void)としての空間を測るために心理的距離といった空間との関係性を見出すことで空間把握を行い、鑑賞者を巻き込む程の空間操作を行っていたと結論付けた。

第Ⅲ章では、これまでの研究をもとに実践研究を行い、最終的に作品化へといたるまでの経緯をまとめている。展示空間との関わり方を意識した《ペインティング・ライフ》、空間における内側と外側の意識を反転させようとした《世界は色彩に溢れている》、作者と場との関わりを意識した《melt blue》、自身の行為の集積で内包空間をつくった《infor》といった4つの実践研究を通して、「自分の軌跡の視覚化」、「空間を素材として捉える」、「自然空間に介入」という研究者独自の空間への関わり方を導き出した。さらに、2節ではその空間への関わり方を模索する行為を「彫刻的思考に基づく空間表現」と置き換え、研究者自身が空間との関係性を見出し、自らの存在を模索する行為こそが、「空間に影響を与えるより効果的な方法」であるとする結論にいたった。

その具体的な方法こそ、「空間を彫刻する」というコンセプトである。これは研究者が彫刻に従事していた背景を経て見出した、「空間を素材とした彫刻作品をつくる」という、空間を質量ある物質と捉え、空間を削り取るような行為によって作品化を試みることに同時に、行為そのものが「空間そのものをつくり出す(彫刻する)」という2つの制作過程を意味した言葉である。このコンセプトをもとに作品《彫刻された日常》を制作した。その結果、空間を削ることによって、研究者自身の身体の延長線上にあるフォルムを展示空間の中で見出すことができた。それは、その場にあった空間を変容させるほどの効果を確認することができ、また本来不可視であるはずの研究者の内的世界を可視化させるに至った。その可視化された内的世界こそ空虚な空間(void)であった。さらに本研究では、後に制作された《彫刻された風景》と《彫刻された日常》を比較することで、最終的な成果として見出したコンセプト「空間を彫刻する」の可能性を検証している。

最後の結論では、これまでの研究を振り返り、作品《彫刻された日常》が生み出された背景を概観することにより、コンセプト「空間を彫刻する」の効果について反省を加えている。すなわち、空間とは全ての事象を包み込むものである存在であることから、他者も空間に関わりをもっている。したがって、このコンセプトは研究者個人に留まるものではない。誰もが自らの手で各々の空虚(void)な空間として生み出すことができる。本研究で見出した「空間を彫刻する」というコンセプトはその空間を認識するためのきっかけに過ぎない。しかも空間は、時間や環境とともに絶えず変化する。つまり、今回、制作した作品《彫刻された日常》は空間を変容させるひとつの事例である。とめどなく変化する空間を冷静に見極め、研究者自身もまたその変化に応じて変化し続けることで、どのような場所においても、空間を素材とし、作品として展開することができるといえる。

2 学位論文審査の要旨

山下圭介による本研究論文は、彫刻における空間表現「空間を彫刻する」実験と実践として、人間の空間意識の在り方を「量 (Mass)」と「空虚 (Void) の二つの要素に分け、彫刻がもたらす空間の変化について様々な視点から考察をおこなっている。

研究論文第1章「空間表現の考察」では、既存の空間表現の形式を分類するために、彫刻が空間とどのような関係を保ちながら今日に至ったかという視点から、「空間表現からみる彫刻史」として外観し、彫刻によってもたらされる空間の影響を考察している。さらに「彫刻と建築／空間への作用」とし、彫刻とは本来建築の一部であり、彫刻には用途があり、やがて建築と彫刻はそれぞれが独立したものとして扱われるが、20世紀になると、再び二つの領域はとろけ出し曖昧となった点を彼なりの論理で展開し、それにより、彫刻作品にとって建築の要素を含む作品がより効果的に空間に変化をもたらしているかを導き出している。

第2章「空間表現の様々な方法」においては、1章における考察をふまえて、彫刻と建築の要素が融合すると、空間そのものに我々が認知しやすい変化が生じる点を、それぞれの要素を合わせもつ作家として、ロシア構成主義のウラジミール・タトリン、英国の鉄を素材とする彫刻科アンソニー・カロ、80年代ブリティッシュ・アートのレイチェル・ホワイトリードを例として取り上げ、それぞれの作品に認められる空間への作用について考察している。その結果、それら三者三様の方法をもちいて、量 (Mass) としての空間をはかるために物理的距離を、空虚 (Void) としての空間をはかるために心理的距離といった空間との関連性を見出すことで空間把握を行い、鑑賞者を巻き込むほどの空間操作を行っていたと結論付けている。

第3章「空間を用いた実践」においては、これまでの研究をもとに実践研究を行い、最終的に作品化へといたるまでの経緯をまとめている。展示空間との関係性を意識した〈ペインティングライフ〉、空間における内側と外側の意識を反転させようとした〈世界は色彩に溢れている〉、作者と場との関わりを意識した〈Melt Blue〉、自身の行為のしゅうせきで内包空間を作りだした〈Infor〉といった4つの実践研究を通して、「自分の軌跡を視覚化」、「空間を素材として捉える」、「自然空間に介入」という研究者独自の空間への関わり方を導き出した。さらに2節では、その空間への関わり方を模索する行為を「彫刻的思考に基づく空間表現」と置き換え、研究者自身が空間との関係性を見出し、自らの存在を模索する行為こそが、「空間に影響を与えるより効果的な方法」であるとする結論にいたっている。そしてその具体的な方法こそ研究者にとって「空間を彫刻する」というコンセプトである。これは研究者が彫刻制作に従事した背景を経て見出した、「空間を素材とした彫刻作品をつくる」という、空間を質量ある物質と捉え、空間を削り取るような行為によって作品化を試みることに加え、その行為そのものが「空間そのものをつくり出す (彫刻する)」という2つの制作過程を意味した言葉なのである。

研究者の主たる作品は、藤沢アートハウスに制作されたインスタレーション作品「彫刻された日常」である。藤沢アートハウスは、旧豊田市藤沢こども園を愛知県立芸術大学がアートスペースとして活用した空間であり、1階部分だけでも優に300㎡の広さを持つ展示空間である。そこで研究者は、その1階部分全体を枝の集積により森と化したのである。ただ集積とはいえ、枝による構成は彼の空間との関係性による身体的ドロ잉のように配置・展開され、北側より差し込む安定した光を頼りに奥行きが導かれる、実に知的な空間構成となっていた。エントランスの導入部分より枝の集積率と光の関係は、独自の彫刻空間をつくり上げながら内部へと連続されており、当然のことながら展示施設中央部は全体的に枝が心地よく密集し、唯一北側高窓より差し込む光が、それぞれの密度ある対象としての枝の集積との距離を保たせて、空間全体に彫刻としてのボリュームを与えていた。先にも述べたが「空間を彫刻する」とは、「空間を素材とし彫刻作品をつくる」と「空間そのものをつくり出す（彫刻する）」という2つの意味を持つ。これは研究者自身の空間への関わりを見出すとともに自らの存在を模索する行為が、素材と向き合い彫刻作品をつくる様子と類似していることから導かれたものである。従って藤沢アートハウスで制作されたインスタレーションを「彫刻的思考に基づく空間表現」と置き換え、本作品は研究者の空間と彫刻の関係性を、集積された枝によって光（視覚）と身体でとらえ表現した彫刻作品といえよう。まさに作品「彫刻された日常」は、これまで研究者が積み上げてきた実験・実践をもとに、論文との整合性も含め十分に成果のある最終作品として受け止められよう。

最終の結論において研究者は、今後の可能性も示唆し以下のように述べている。作品「彫刻された日常」が生み出された背景を概観することにより、コンセプト「空間を彫刻する」の効果について、空間とは全ての事象を包み込む存在であることから、他社も空間に関わりをもっている。従って、このコンセプトは研究者個人にとどめるものでなく、誰もが自らの手でそれぞれの空虚（Void）な空間を生み出すことができる。本研究で見出した「空間を彫刻する」というコンセプトは、その空間を認識するためのきっかけであり、しかも空間は、時間や環境と共に絶えず変化する。つまり、今回制作したインスタレーション作品は、空間を変容させるひとつの事例である。とめどなく変化する空間を冷静に見極め、研究者自身もまたその変化に応じて変化し続けることで、どの様な場所においても、空間を素材とし、作品として展開・成立させることが可能なのである。

以上の研究論文並びに最終作品から導き出された結論及び研究成果は、いかにも彫刻専攻実技系の学生らしい身体的で創意工夫に満ちた研究内容でありオリジナリティー溢れるものとなっている。よって山下圭介の実践的で独創的な論文及び最終作品は、博士学位取得に十分値する内容であると判断した。

3 最終試験結果の要旨

本審査の結果を受け審査委員会は、山下圭介の研究論文及び最終作品はともに、近現代彫刻史に対する理解と分析を自作に沿って展開したものであり、その内容は博士学位取得にふさわしく優れたもので、よってここに山下圭介を学位最終試験において合格と認めた。